

八重山の年中儀礼：考察への予備的覚書(1)

植松, 明石 / ウエマツ, アカシ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

243

(終了ページ / End Page)

292

(発行年 / Year)

1978-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015537>

八重山の年中儀礼

——考察への予備的覚書(一)——

1 はじめに

よく知られるように、沖縄の年中行事は、稲や麦の栽培過程における季節的祭祀を基本としておこなわれてきたとされている。⁽¹⁾ 十八世紀はじめ首里王府によって資料収集、整理編集された『琉球国由来記』二一巻『琉球国旧記』二〇巻の中で、大部分を占める「王城の公事」「各処祭祀」に記される詳細な首里王府の年中行事、各村々の祭祀の諸相が、農耕儀礼を中心として展開されているのは、その端的なあらわれともみられよう。そしてこれらの祭祀儀礼の多くは、現在もおこなわれ、或は記憶にとどめられている。

年中儀礼の研究は民俗学にとって歴史の古い、そして主要な分野であったから、それだけに本土の

植松明石

資料を中心に多くの成果が集積されてきた。沖縄の年中儀礼は、そうした研究の中にもしばしば考慮され、また重要な示唆を与えてきたが、それは沖縄の諸習俗が日本文化の祖型あるいは古俗を示すと考えられてきたからである。沖縄の民俗文化に関する論文、資料は、現在まで非常に多くが集積されているが、特に第二次大戦後は、それまで主として沖縄本島及びその周辺地域の資料が中心であったのに対し、広く宮古、八重山地域の資料も集積されるようになり、それらをふまえてようやく沖縄の年中儀礼の概観があきらかになってきた。昭和三四年の比嘉春潮による「年中行事」及び「年中行事一覧表」⁽²⁾は、沖縄本島を中心としながらも、宮古、八重山の儀礼も考慮され、多彩な沖縄の年中儀礼の諸相が我々に提示されたのである。その後の調査の盛行は、さらに島毎、部落毎の詳細な資料に基づく多くの民俗誌の刊行となり、地域的偏差を問題とすることも可能にさせている。

広く社会的、宗教的あるいは歴史的な生活の総合的表現としての年中儀礼の意味を如何に解釈するかは非常にむずかしいことであるが、本稿では、その考察の予備的な手がかりの一つとして、八重山における年中儀礼のもつ時間的な構成要素についての⁽³⁾べる。ただし古い、新しいという通時的視点はここでは用いない。

事例としては、古くから田国島とされてきた稲作を中心とする村として、石垣島白保、石垣島宮良、与那国島祖納、野国島として、黒島宮里、新城島上地五部落の資料を中心とした。これらの資料は次によった。

白保 昭和三九年、四〇年夏期における筆者の調査と、昭和五二年出版『白保 八重山白保村落

調査報告書』琉球大学社会人類学研究会 による。

宮良 『沖繩民俗』23 琉球大学民俗研究クラブ 昭和五二年。

与那国島祖納 昭和五二年十一月筆者調査、『与那国の歴史』池間栄三 昭和三三年による。

黒島宮里 主に昭和五〇年筆者調査のもの。

新城島上地 昭和三五、六年筆者調査。

注

(1) 比嘉春潮「年中行事」『日本民俗学大系』12 昭和三四年

(2) 右に同じ。

(3) 八重山の年中行事の構造については、伊藤良吉「年中行事の構造——沖繩・与那国島比川の事例——」(『民俗学への思索——中京大郷土研究会十二周年論集』昭和五二年)がある。//行事の意味に「主題と象徴」というメルクマールを設定して年中行事の時間的な再構成を試み、その結果として「夏と冬」(「物忌と祭り」の二重構造と、さらに「自然」と「文化」の対立、「神の世」(「この世」)の三分構成を示すとする。

またコルネリウス・アウエハントは、「波照間島の神行事について」(『沖繩文化』二三 昭和四二年)で、波照間島の一年はツクリユの九カ月と、仏事などをおこなう「空いている」三カ月にわけられ、さらに九カ月を三期にわけ、作物願いの密度と対応させている。

2 年中儀礼の諸相

八重山の年中儀礼を示す事例として(A)白保、宮良、与那国島祖納 (B)黒島宮里、新城島上地の場合を別表に示した。詳しい内容についての考察は、別の機会にすることとし、ここでは儀礼の内容を粗略するにとどめる。なお、(A)は稲作に比重をおく村、(B)は畑作に比重をおく村の意である。

(A) 1 石垣市白保 この部落は、一七七一年の大津波で大被害をうけ(一五七四名中、生存者二八名と
いう)、部落再建のため波照間島から四一八名を移住させたとされ、生れ島波照間との関係がみ
られる。

(A) 2 宮良 白保に隣接する部落。一七七一年の大津波で大被害をうけ、部落再建は、小浜島民の移
住による。プーリイのアカマタ、クロマタはその際の小浜島よりのものと由来される。

(A) 3 祖納 八重山ではやや隔った存在である与那国町の部落。

一月

〈白保〉

一日 戦後新暦の正月が奨励されはじめ、現在家庭の正月は新暦でおこなっている。しかし、御嶽

の願いごとは旧暦でおこなう。家々では井戸からパチミズ（若水）をくみ、ザートウクの花いけの水とする。ザートウクには飾り重箱（米、昆布、木炭など）や鏡餅を供え、別にトウク（仏壇）や火の神にも供物をする。午後年始まわり。御嶽では神役がニントウオガミをし、新年における人々の健康や作物の豊作を祈る。

四日 ピナカンニンゲー 一年最初の火の神への願いとされる。女が朝早く、十二月二四日に昇天したピナカンの降りてくるのを迎え、新年における人々の健康、作物の農作、一年の繁昌を祈願する。

八日 ヨーガー 年二回、一月と八月におこなわれる。男がザートウクのフンジンに、八月ヨーガーまでの家族の健康をいのる。女による家庭の運氣占いがある。

十六日 ジューロクニチ 先祖をもてなし供養する日。一年最初のウヤピトウ供養の日であるからウヤピトウのネントウであるといわれる。墓を掃除し、午後から墓に行き供物をそなえ、紙銭を焼き、子孫の守護を祈願し、御馳走をたべ、三味線、歌、踊りで楽しむ。

〈宮良〉

一日 ショウガツニントウ 現在新暦で正月をおこなう。すでに四〇年余たつという。

二日 ハツウクシ 早朝、農具をもって野で農耕のまねごとをする。

十六日 ジューロクニチサイ 午後より墓に行き供物をそなえ、焼香、ウチカビをし、後御馳走をたべ、三味線をひき、夕方までたのしむ。

納)

石垣市宮良		(A) 与那国島租納			
(2)定日でないもの	その他	月	[1] 定 日	(2)定日でないもの	その他
きのえ ユーニガイ	8. 18. 28. コンズンニガイ 各自のマリビ ウンキニガイ シヨウニンヨ イ (マリ年)	1	1. スンカテイ 2. パチウクシ 16. ジューロックニチ		マリトシ
きのえ タカビ うし ニンガツヨイ みずのうし、とり ニンガチムヌン		2	チンガン	初庚 ドゥスニンガイ ニンガチマチ 甲子 ムラウチニンアイ (牛, 村) 甲丑 ウチニンアイ (牛, 個人) 庚亥 カドムヌン	
みずのえ フチャバムヌン		3	3. サニティ	壬亥 ツバアムヌン	
かのと プームヌン		4	1. イスカバイ	初庚 ドゥスニンガイ 初庚未 フムヌン	
きのえ ウフラズムヌン きのと (最後のムヌン) かのを スクマンカイ ひのえ ウマラシムヌン		5	4. ドウガヌヒ	初己亥 ドムヌムヌン (終) アミウリ	
マイスハツ きのえね ユーニガイ (ユーノシュビ) みずのえ プール ユングマル オンプール ムラプール		6		丙午 ウガンフトテ	

表1 年中儀礼一覧表 (A. 石垣市白保, 石垣市宮良, 与那国島租)

農耕暦 (概略)	(A) 石垣市白保				(A) 与那国島租	
	月	(1) 定 日	(2) 定日でないもの	その他	月	(1) 定 日
田 植 粟 在来稲	1	1. ソンガチ (ニントウガン) 4. ピナカンニントウ 8. ヨーガー 16. ジューロクニチ		トウスビー 61才, 73才	1	1. ションガツ ションガツネット 2. ハツウクシ 16. ジューロクニチサイ
	2	ピンガン	ニゾゴチカカベ		2	ピンガン
	3	3. サンゴチサニチ			3	3. サニツ 15
	4	1. バクの害よけ願い	ミズのうし バチヌソウジ みずぬびー ナカヌソウジ みずのとりに トゥミヌソウジ	ソウジ	4	ムニンソーズ
	5		木の日 インドウミ 木の日 ヤマドウミ		5	15
	6		木の日 オースクマ かえいぬ プーバケ かにん ティーラスイー きのえとら プーブーリン きのとう エンヌユーニゲ かのとみ ユーニンゲ	ブーリン	6	

石垣市宮良		(A) 与那国島租納			
(2)定日でないもの	その他	月	(1) 定 日	(2)定日でないもの	その他
		7	13. スル 15. (しろうこ七夕の月)		
きのえね 初みず 十五夜後の初つちのとい 翌日	ユニガイ カーニガイ シツ シツヌマンカイ	8. 18. 28. コンズンニガイ 各自のマリビ ウンキニガイ6 シヨウニンヨ イ (マリ年)	8 15. ドンガヤ チンガン	初庚 アラगतタカビ 初壬 アラミテイ ドゥヌニンガイ (世願) 初丙子 ヤダクネガイ 甲子 ムラウチニンアイ 甲丑 ウチニンアイ (牛)	8. クルタテ
うし	クンガツヨイ	9	9. クンテイ	第一己亥 シテイ	
みずのえ みずのえのうま つちのえ	タカビ タニドゥル	10	1. イスカバイ	初庚午 ドゥヌニンガイ きのえ, きのと タナンドリ (除, 子, 酉, 丑, 午)	
い	ハナシキニガイ シマフチヤリ	11	7. カンチャヌダイ トンデ		マチリ
		12	ニンドヌスビ 31. トシノユル		

		(A) ₁ 石垣市白保			(A) ₂	
農耕暦 (概略)		[1] 定 日	[2] 定日でないもの	その他	月	[1] 定 日
(播種期のずれ 巾は相当ある) 粟 麦 在 来 稲	7	13. ソーリン 15. ... 16. (ミチブシ)			7	13. ソーロンヌシキヌヒ 14. ナカヌソーロン 15. ウクルヒー 16. イタシキバラ
	8	8. ヨーガー ピンガン 15. ジグヤー	アラミズニン 木, 火 メーラニンゲ の日	トウスイビー ニンゲイ	8	15. ジューグヤア
	9	9. クンゴチクニチ	十五夜後の つちのびー シイチイン		9	9. クンガチクニツヨイ
	10	1. 火事よけの願い	シイチイン後 のつちのとり (10月タカベ)	ユーニンゲ	10	
	11	7. フキヌヨイ トウジ (バチソングチ)	木の日 } 水の日 } タニドゥリ		11	7. フキヌヨイ
	12	24. ピナカンニンゲ 31. トウシヌユー			12	24. トシノシュビ (火の神)

251. 八重山の年中儀礼

ユーニガイ きのえの日。神役が新しい年の農作物の豊作を祈願する。
マリドスニガイ

〈祖納〉

一日 部落の金持、人気のある家の井戸の水をあらそってくみ、これを火の神、トラノハ（神床）、
仏壇、ビディリに供える。別に浜から砂をとり香炉の砂をとりかえ、海水でカマドを清め、海水も供
える。正月は新暦でむかえている。

二日 ハチウクシ 朝、それぞれの仕事をやる。

十六日 ジューロクニチ 墓参り。

マリトシ 一三、二五、三七、四九、六一、七三、八五、九九の人が、自分の生まれ年（十二支）
にあたった日にお祝いする。

二月

〈白保〉

ピンガン トウクに供物をあげ、先祖の供養をし、家族の幸運を祈願する。わら火を門でたき先祖
をむかえる。紙銭をたき供物をする。ツカサは御嶽に行かない。

二月タカベ 八重山から上納のため首里へ行く船の安全祈願。二月は下り旅、十月は上り旅という。

今は行なわれない。

〈宮良〉

ピンガン 夜、紙錢をもやし、仏壇に供物をする。

タカビ きのえの日 田植完了の報告と稲の順調な成育を神役が御嶽で祈願する。

ニンガツヨイ 丑の日 牧場の組合員によっておこなわれる。牛、馬の成育祈願。かつて牧のツカサとよばれる男性のツカサが存在したという。

〈祖納〉

チンガン 墓参り。

ドゥヌニンガイ 初庚 一カ年の世乞い。

ムラウチニンアイ 甲子 村の牛願い。

ウチニンアイ 甲丑 個人の牛願い。

カドムヌン 庚亥、田植後、最初のムヌンである。神役らが聖所を巡拝してあるく。

三月

〈白保〉

三日 サンゴチサニチ ザートック、トック、火の神に供物を供え、家族、子孫の幸運祈願をする。

午後御馳走をもって女のみでなく男も浜に行き潮干狩をする。女の健康願いの日といわれ、この時つくる菱形、三角形のヨモギ餅は女陰をかたどるといふ。

〈宮良〉

三日 サニツ 女は浜遊びに出かけ、海の幸を料理してたべる。三角形のヨモギ餅をつくり、仏壇や神床に供える。神役は御嶽で祈願する。

フチャバムニン 三月十五日から五月十五日までの約二カ月間は、インドゥミ、ヤマドゥミとよばれる物忌の期間で、女の海への立入りや、山の木の伐採が禁止されていた。この間、九回の祈願がなされたときされるが、詳細は不明である。フチャバムニンは、一、二度目の草取りの頃の物忌で、害虫の駆除、稲の成長を祈願する。

〈祖納〉

三日 サニチ 海に足をぬらしに行く。三角形の餅をつくる。

ツバアムヌン 壬亥 神役部落員全員が、定められた浜に行き、十二時すぎになると合図により全員西枕でねる。しばらくして鶏の鳴き声でおきる。弁当をたべ、村総会、相撲、競馬などの余興がある。田草をとる頃である。

四月

〈白保〉

一日 パクヌニンゲー 蛇の願い。神役が御嶽で祈願する。

パチヌソージ みずのうし 稲が成長し、穂が出はじめる頃に最初のソージがある。以後およそ十日毎にナカヌソージ、トゥミヌソージとソージがある。神役は御嶽で立派な出穂があるよう祈願し、家々では夜、知らせにより全員浜に行き、東枕でねる。鶏の鳴き声でおきて再び西枕でねる。これを三回くりかえす。

二回目のソージはシマフサランともいい、神役の御嶽での祈願と別に、流行病が部落に入らぬように、部落で馬を殺しこの血で染めたシピジナを家の入口、部落の入口に張る。また芭蕉の葉で舟をつくり馬肉、花米、酒をのせ東の海に流す。

三回目のソージは最初と同様おこなう。

〈宮良〉

プームヌン 穂の出はじめる四月頃おこなわれ、神役が順調な結実を祈願する。

〈祖納〉

一日 イスカバイ 衣がえ。

ドゥヌニンガイ 初庚 世乞い。

フムヌン 初庚末 四月末、五月はじめ頃やる。穂が出る頃だがまだ熟していない。一同浜に出て

ツバアムヌンと同様にやる。

五月

〈白保〉

インドウミ トウミノソージから十日程後にくる。神役は御嶽で穂の無事結実を祈る。女は海に行くことが禁じられる。

ヤマドウミ インドウミのあと十日位の頃。この間男が山に行くとカミが怒るとされる。四月のパチヌソージからこのヤマドウミが明けるまでがソージであるといわれている。

〈宮良〉

ウフラズムヌン きのえ、または、きのと、最後のムヌンとされる。ムヌンの終了と豊作、収穫の良日を祈願する。アワ、キビのイバツを各家から集め、祈願をする。

スクマンカイ かのえの日 ムニンソーズがすむと、スクマンカイと称し、各家でスクマ（初穂三、四本の束）を仏壇に供えまた家の中の梁にさす。神役にも届けられ、神役はこれを御嶽に捧げ、収穫の円滑をねがう。このあと稲刈りとなる。

〈祖納〉

四日 ハーレー 大漁祈願。

ドムヌムヌン 初己亥 最後のムヌン。神役、役員らがやる。定められた屋敷内から害虫、ねずみなどをとり、それを芭蕉で作った帆船にのせ、きまった岬から海に流す。ユガフのシマに行くよういのる。

六月

〈白保〉

オースクマ ヤマドゥミがあけると、稲は結実した頃となる。木の日におこなわれる。一定の田から穂をとり、祈願する。またこの穂から玄米をとり御嶽にささげ、収穫とプーリンの無事遂行をいのる。家々では自分の田の穂をとり柱にさげる。この穂の米はシツインの時のまぜ飯に入れる。

プーバナ オースクマから二週間位の頃。各家庭でザートウク、トウクに初米をささげておがみ、御嶽では神役の祈願がある。

ティーラヌイー かねの日 ブナリの一年の祈願を感謝し、新米を姉妹や伯母におくる。

プーリン 木の日。

一日目 バンプドキ 去年のプーリンでかけた願をとく。

二日目 プープーリン 甲寅 収穫された米、粟を捧げる。

三日目 エンヌユーニゲー 来年の世願い、ミルクが出(戦後から)、綱引の豊凶占、ブナリ・ビ

キリによる物種子の授受などがある。

ユーニンゲー プーリンの後辛己の日。

〈宮良〉

マイヌハツ 稲の収穫がすむと、ツカサに白米をとどける。ツカサはこれを御嶽に供え、収穫終了の報告と感謝をする。

ユーニガイ きのえの日 ユーノシュビといわれ一年間のしめくりである。今迄の祈願がききとどけられたことへの神役の感謝。

プール みずのえの日 アカマタ・クロマタが出る。収穫の祝いと来年の豊年祈願。

一日目 ユングマル

二日目 オンプール

三日目 ムラプール

〈祖納〉

アミウリ 神役、役人が祈願する。

ハチゴメ 初穂を仏壇の柱にさげる。

ウガンフトテ 丙午 一年の祈願をとき、来年の豊作をいのる。十山御嶽に神役、役員らが一晚こもり祈願する。余興がある。

七月

〈白保〉

十三日～十五日 ソーリン。獅子舞、アングマーがある。

〈宮良〉

十三日～十五日 ソーロン

十六日 イタシキバラ 盆に招かれなかった迷いソーロンの供養のためといわれる。神役、老人らによる旧家巡り、獅子舞、アングマーがある。

〈祖納〉

十三日～十五日 スル

八月

〈白保〉

一日 シキタチ 七月は盆の月で、神役は御嶽に行かないので、この日がプーリン後、はじめての拝みをする。

八日 ヨーガー この年後半のヨーガーである。ザートウクで一月までの家族の健康ねがいをする。

ピンガン

アラミズニン 初みずの日。ミズムトの神役が役員と御嶽を巡り早ばつがないよう豊年を祈願する。
十五日 ジグヤー ザートックで男の健康願いをする。アカマミムチ(男根になぞらえるという)を作る。庭にむしろを出し、祭壇をもうけ、月を拝む。

メーラニンゲー 木か火の日。宮良のウ(屋号)に神役、役員らが行きユーニガイをする。

〈宮良〉

ユーニガイ きのえの日。初願いであるという。神役らが農作物の豊作祈願をする。

カーニガイ 初みずの日。湧水への感謝。各家庭の井戸でおこない、満潮にあわせ、子の方向にむかって祈願する。

キツガン シツ前のかのえとらの日。明治十七年よりはじめられた儀礼という。身分制度の撤廃を祝い、差別が二度とないよう祈願する。神の年である子、丑、寅、酉の年に行う。現在は寅、丑の年でオーセで祈願がある。

シツ 十五夜後の初のつちの日。一切の不浄を払う日とされ、食物に関する器具すべてを海で洗う。海から砂をもち帰り、門や家の四隅に盛る。シツカザで胴をまいたカメに、シデイ水をみたす。シツカザは家の柱にもまき、人々はサトウバイという草を麻の糸で通したシツダマを首にかけた。井戸に封をし、人々は立木の上の物見台から変異の兆をみはる。シツフルマイという年中で最も豪華な食事

を夜たべる。

シツヌマンカイ シツの翌日、神役により聖井で村の繁栄、豊作祈願がある。

〈祖納〉

八日 クルタテ 悩みごとのある女は、ユタにより香炉をまつるようにいわれ、その祈願をする日であった。

ムラウチニンアイ ねの日 村の牛願い。

ウチニンアイ 甲丑 個人の牛願い。

アラガトタカビ 初庚 伝染病をさけ、忌むという意味で、由緒ある墓や御嶽を神役や役員らが祈願して歩く。

ダテグクイ 屋手久丘の頂上にある遠見小屋跡で、神役、役員らが海上保安の祈願をする。

十五日 シュウグヤ 男の十五夜という。赤豆入り壘丸形の餅をつくる。庭に祭壇をつくり、供物を供え、上る月をおがむ。

ドゥヌニンガイ 世の願い。

九月

〈白保〉

九日 クンゴチクニチ 男の健康願ひ。家ではザートウク、トウク、火の神に、神役とヤマニンズは御嶽で祈願する。また甘藷の願ひをする。

シツイン 十五夜後の土の亥からはじまる。九月末から十月初め頃である。シツイン以後の作物は、来年の作物であるという。つくる願ひ。三日間。神役は御嶽で祈願する。

一日目 水を浴びせる日。潮水を火の神に三度かける。香炉の灰をとりかえる。(トシヌユにもとりかえる。) 海の砂を門にまく。ナベ、マスなどを海水で洗う。まよけのシツツイダマという植物で柱や臼をまく。

二日目 一年の吉凶を屋根や木の上にのぼってたしかめる。

三日目 終りの日 まぜ飯をたべる。

シツインは農作物の周期のはじまりといわれる。プーリンまでの作物は今年の作物で、七月に御嶽はじまる。八月にユーニンゲーがされ、九月のシツインから新たに耕作がはじまり、このあと間もなくタニドゥリがくる。一年はシツインからはじまり、トウジイで年の半分となり、六月プーリンで終わるという。

アングヌニンゲー(ユーニンゲー)

アラタビ シツイン後の土酉 最初の来年の豊作願ひ。

ナガタビ 中のねがい 土の子

ブタビ とどめのねがい 土の寅
三カ月おきにくる。

〈宮良〉

九日 クンガツクニツヨイ イモの感謝、男の健康願いを神役がする。

クンガツヨイ 丑の日。牛の種子つけ終了祝。神役が牛肉のクバンで祈願する。

〈祖納〉

九日 クニテイ うまれた子は、この日に御嶽におまいりに行く。

シテイ 第一己亥、つちのとい 病魔退散のためという。カズラをとってきて柱や門にまく。三日
間獅子舞があり、部落中をまわる。神役は関係ない。豚、牛を殺してたべる。水を汲むことはない。
夜男女とも墓や坂上の小高いところに行きマジモノをみに行く。

シテガン 七年に一回ある。今迄の特別の念願をとく。

十月

〈白保〉

十月タカベ 首里への上納船の安全祈願。今はない。

ユーニンゲー シツイン後の土酉

〈宮良〉

タカビ みずのえの日 火事、海難事故除の祈願。二月タカビと同様。

タネドリ みずのえうま、つちのえ 各戸において戸主(男に限る)が朝早く苗代に播種する。帰宅して火の神、仏壇、ザートコに、供物(イバチなど)をそなえ祈願し、一日中つつしむ。神役は御嶽で祈願する。翌日、カタバルアソビ。闘牛をやったり楽しくすごす。

〈祖納〉

一日 イスカバイ 衣更え、神役、役員の祈願。

ドゥヌニンガイ 初庚午 豊年祈願。

タナンドリ きのえ、きのこの日(子、午、丑を除く) 米のイハテをつくり仏壇、火の神、ザートコなどに飾る。出嫁した長女が三日目にやってきて仏壇に線香をあげ、火の神をおがみ、イハテをさげる。田畑のビジルにも祈願する。

十月～十一月にかけて約一カ月マチリの季節となる。

クブラ祭(久部良) 第一庚申

ウラ祭(祖納) クブラ祭の翌辛酉

ンデ祭(比川) 甲子

ンマナガ祭(島仲のナウンニ及びサンアイのトネ) 壬午

ンダン祭(与那原のトネ、ミドド山)　ンマナガ祭の翌癸未
アンタドゥミ　ンダン祭の翌甲申

十一月

〈白保〉

タニドゥリ　木か水の日。三日間。

一日目　カタバル。アカファイチが出る。

二日目　男が朝早く苗代に播種する。神役は、御嶽で苗の成長をいのる。家々ではザートック、トック、火の神にイバチを供え祈願する。肉や魚など血の出るものは用いない。ソージとしての食事という。静肅が求められる。播種が終ってから、苗代に近い人同志が家々をまわって種子とりのアヨーをうたう。

三日目　神役がトウミムトをまわり祈願する。

トウジー　パチソンガチといわれた。

七日　フキヌヨイ　鍛冶屋の祝い。

〈宮良〉

七日　フーギヌヨイ　早く廃止された。鍛冶屋と農具の感謝、刃物によって殺された動物供養。不

浄の払いという。

〈祖納〉

七日 カンチャヌダイ 二十年程前までやっていた。フィゴを管理している人がやった。ゾーシや餅をたべた。

トンデ(冬至) 夕飯にゾーシをたべた。

十二月

〈白保〉

二四日 ピナカンニンゲー ピナカンが天にのぼる日。一年中のその家の報告をするという。

大晦日 トシヌユー 豚、馬を殺し、正月の準備をする。年こしソバをたべる。この日、作物のカミと富裕の神が家々を訪れるといわれる。

〈宮良〉

二四日 トシノシユビ 神役が御嶽で六月ユークイと同様の祈願をする。

〈祖納〉

二四日 ニンドノシユビ

三一日 トシノユル

(B)1 黒島宮里 野国島に数えられ、低平な隆起珊瑚礁の島。宮里は他の部落の親部落と考えられていたが、今は数戸となり、廃亡寸前である。

(B)2 新城島上地 黒島同様野国島。西表島その他への移住がすすみ、廃亡寸前である。

一月

〈宮里〉

一日 ソンガチカミニントゥ 一番どりが鳴くと井戸に水をくみに行き、花いけの水にする。水あびはない。夕方から綱引き(ユニガイ)、ミルクが五穀の種子(アワの穂)を西からくるシャーカに渡す。御嶽や部落の中央にある霊石に祈願する。

二日 ハツウクシ 男が早く畑に行き耕してくる。

三日 フネノハツウクシ 昭和初期まで。

四日 火の神が天からおりる日。小石を海水で洗い、火の神のまわりにおく。にんにく、豚肉など供える。この供物は女のみたべる。

十六日 ジューロクニチ 墓参り。

〈上地〉

一日 朝未明におき、井戸から初水をくみ、花いけの水にする。神役と共に御嶽で祈願する。

新城島上地	
〔2〕 定日でないもの	その他
かのえとら ドウバダニガイ	トシノヒ
きのえと タカビニガイ タービスシュビ	
フサバノソウズ インドウミ	
ヤマドウミ ブーノソウズ ウヤンチューノソウズ ヤマノフツカール	
アースクマ かに、みず アープール (プラメ) ドメムヌン	
かのと みずのえ ウフブール みずのと	

〈宮里〉

二月

十六日 ジューロクニチサイ 先祖おがみの日。前日墓を掃除し、当日、餅、御馳走、酒などもって墓に行き焼香し、三味線などひいて楽しい時間をすごす。グショウの人々の正月だという。
 ドウバダニガイ かのえとら 神役、役員らが御嶽で健康願いをする。
 トシノヒ 各自のうまれ日(十二支)に祈願する。各家でおこなう。

表2 年中儀礼一覧表 (B. 黒島宮里, 新城島土地)

		(B), 黒島宮里			(B),	
農耕暦 (概略)	月	(1) 定 日	(2) 定日でないもの	その他	月	(1) 定 日
田 植 麦 在来稲	1	1. ソンガチカミニントウ 2. ハツウクシ 3. フネノハツウクシ 4. 火の神降天 16. ジューロックニチ 8. コンジン願い			1	1. グワンタン ハツウクシ (下) 16. ジューロックニチサイ
	2	ビンガン	きのえうま } きのえとら } ニンガツグサシ バハフサノニガイ		2	ビンガン
	3	シーマイ 3. ハマホリ	アワノホノソージ		3	3. サンガツサニチ シイマイ
	4		アワノムヌン つちのとら } きのえうま } スクラハミノ ネガイ ネズミノソウジ		4	
	5		かのえ, ひのえ スクマ バナウヤシ		5	
	6		かのえうま } きのえうま } プウリイ かのえとら } きのえとら } ヤマバンネガイの ウバンプトキ		6	

新城島上地	
(2) 定日でないもの	その他
益後、タネドリ } 前のつちのといぬ } シツ い } きのえ、きのと キツガン	
みずのえ ミズノニガイ みずのと きのえ ヤマニガイ きのと シメフサリ	
つちのえとのね } うし } アータニドリ ウクスムヌウ ジュンガツカビ コメノタニドリ	
みず リュウグウマツリ	

ピンガン
 ニンガツグサン きのえうま、きのえとら 一人五勺の粟をだし、神に捧げる。年に三回（五月、十月、二月）。

バハフサノニガイ 粟の一回目の除草の頃。葉に虫がつかないよう祈願する。

〈上地〉
 ピンガン 墓参りはしない。
 タカビニガイ きのえとの日 伝染病、遭難などの危険の予防、防止のための祈願をする。神役、

		(B)、黒島宮里			(B)	
農耕暦 (概略)	月	[1] 定 日	[2] 定日でないもの	その他	月	[1] 定 日
(播種期のずれ 巾は相当ある) 粟 麦 在 来 稲	7	13. } 14. } ソーリン 15. }			7	13. } 14. } ソーロン 15. }
	8	8. コンジンの願い 15. ジューゴヤ	つちのとい キツガン		8	15. スングヤア
	9	9. クンガチヨイ	つちのとい シチ		9	9. クンガツクニチマツリ
	10		つちのえね タネドリ きのえ, かのえ のね, とら, うま ヤマバンニガイ (ニガイウクシ) ひのとい シマフサラ		10	
	11	7. ハーザヨイ 冬至 ハツショウガツ			11	7. フウギマツリ
	12	3L. 火の神, 昇天			12	24. ピノカンマツリ

役員らが御嶽で祈願する。

タービヌシュビ 西表島大原の田で田植えがすんだ後の祈願。各御嶽に神役、役員らが行く。

三月

〈宮里〉

シーミイ やる人のみ。

三日 ハマオリ よもぎの入った餅をつくる。海おりする。

ムンノプバナ 麦の収穫後の感謝。

〈上地〉

三日 サンガツサニチ 女の節供という。ヨモギ入りの餅をつくり、仏壇、神床に供える。潮干狩に行く。貝はとらなくても必ず手足を海水で洗う。昔は女のみのものであった。

シイミイ 墓には行かず、仏壇をおがむ。

バハフサの時期、旧三、四月頃は、稲、粟の花ざかりで非常に大切な時とされた。音のするものは禁止された。この時期にインドゥミ、ヤマドゥミがある。

インドゥミ 三、四月の頃、二十日間位おこなわれた。女が海に行くことを禁止された。

ヤマドゥミ インドゥミの後、ヤマドゥミとなる。粟のみのる少し前の頃で、ヤマの木を切ること

が禁止された。

また、この大切な時期にサウズ（ムヌン）がある。ムヌンのはじまりはタネドリの時のムヌンで、ウクスムヌウという。以後、

フサバノソウズ 二・三月の頃。芽ばえに害虫がつかないようにと祈願する。

プーノソウズ 三月あと、穂に虫がつかないように祈願する。

ウヤンチュウノソウズ 穂が熟す前に、鼠が穂を切らないよう祈る。

トメムヌン（オワリノソウズ） 五月豊年祭の時のソウズ。一年最後のソウズである。

四月

〈宮里〉

アワノムヌン

〈上地〉

プースクマ 粟の穂がほつと出る頃。少年らが各畑から粟の穂を二本ずつとり各家の軒にさす。神役の祈願がある。米のスクマは、各戸がそれぞれ穂の工合でやる。神役の祈願はない。神

五月

〈宮里〉

スクマ かのえ、ひのえ 男が粟穂をとってくる。

プバナウヤシ スクマの後にくる。粟のミキを御嶽に捧げる。収穫の感謝と願フトキ。

〈上地〉

アール 粟の豊年祭。御嶽に粟のミキ、ハナアワを捧げる。アカマタ、クロマタの子神が出現し各戸を巡遊する。各家では粟のニギリを作り神床や仏壇に供える。

六月

〈宮里〉

プウリイ かのえ、きのえのうま、とら 御嶽で一年間の作物すべての祈願をするが、中心は粟である。タネドリから一年のねがいが始まりプウリイで終るとされる。

一日目 ウバンプトキ

二日、三日目 イエンユーノネガイ 来年のねがい ハーリーがあり、ミルクが出る。

四日目 トウルパライ あとかたづけ。

〈上地〉

プール

一日目 ウバンパジ 豊年の感謝と祈願をとく。獅子舞がある。

二日目 ジョウウビ アカマタ、クロマタの親子四神出現。各戸巡遊。アカマタ、クロマタシンカの加入儀礼がある。

三日目 アトヨイ 明け方、アカマタ、クロマタ去る。このあと各家を巡りあるいて踊り、御馳走をたべお祝いをする。

七月

〈宮里〉

十三日～十五日 ソーリン 獅子舞。

〈上地〉

十三日～十五日 ソーロン 獅子舞がある。

八月

〈宮里〉

キツガン つちのとい むすびねがい。願いを解く日。

一日目 神役、役員らが御嶽に夜ごもりする。

二日目 踊り、狂言をする。夜、神役の家にあつまりお祝いする。牛肉の御馳走をたべる。ミルクが出る。

八日 コンジンへの願い。

十五日 ジューゴヤ 赤豆の入ったハブリノコウチモチ（コウモリの擧丸餅）を作る。

〈上地〉

シチ 戌亥 七、八、九月であるが、大体八月が多い、盆のあと、タナドリの前におく。作りはじめのお祝いという。

一日目 土をいじることは禁止。男達は夕方オーセでマキ踊りをする、青年は井戸の番を三日間する。

二日目 鶏の鳴き声と共にバハ水（若水）をくみ、晩に浴びる。人々は麻糸を首にむすんでマブルをする。墓や野原、物見台にインネン火を見に行く。

三日目 ハーリーがある。午後からはじめる。カンフニ（神舟）は上地と下地で出してやった。

この舟の神は上地は女神、下地は男神といわれる。このあと、人々は家々を夜中巡遊しマキ踊りし、御馳走、酒のみ歩く。この間眠ることは禁止。

キツガン 健康、豊作願いのむすびという。昔は四日にわたった。

一日目 トラウノキ 準備の日。夜、御嶽で徹夜の祈願をする。

二日目 祈願する日。ミールクが出る。御嶽にミールクは物種子をもつウフシユヤ子(三名)をしたがえあらわれ、ミールクから種子をいただく狂言をする。あと余興がある。

三日目 トジミ 余興を全員やる。

十五日 ズングヤア 十五夜餅をつくる。庭に台をもうけ供物をそなえ、月をおがむ。このあと南北にわかれて綱引をする、北に勝たす。

九月

〈宮里〉

九日 クンガチヨイ ビチン御嶽で霊石をもちあげ豊作をうらなう。

シチ つちのとい キツガンのあと、クンガチヨイの大抵前にくる。小さな正月であり、この日年をとるともいう。カズラをスキと共に家の四隅にさし、柱、農具にまく。道具を海水で洗いカズラをまく。シチ水をくむ。これで若がえるという。夜、若者がユークイといって家々をまわる。三日間島から舟が出ることを禁止する。人々はカズラを頭や耳につけて食事する。夜、マジモノピーを見に物見台にのぼる。

〈上地〉

九日 クンガツクニチマツリ 菊の花をいけ、酒に浮べてのむ。イモのハチを御嶽にもって行って

感謝の祈願を神役、役員らがする。

ミズノニガイ　みずのえとの日　八、九、十月の中にやればよいという。

ヤマニガイ　きのえとの日　山に行った時の無事を祈る。

シメフサリ　伝染病の予防のためという。山羊を殺し、その血をツピヅナにつけ、門や部落の境に張る。山羊の肉の汁を皆でたべる。

十月

〈宮里〉

タネドリ　つちのえね　部落一斉にやる。早くて旧九月末。家の主人が、潮がみちてくる時、粟穂をもって畑に行き、畑の一隅に播く。帰りにカズラをとってはち巻し、家のヘラにもまく。粟のイバツをつくりザートコ、先祖などに供え、御嶽に行つて祈願する。各戸をまわりタネドリの歌をうたう。仕事はやすむ。

ヤマバンニガイ　きのえ、かのえのね、とら、うま　ヤマバンのニガイウクシである。このウバントキが豊年祭の時である。

シマフサラ　ひのとい　綱を部落の入口にはり、山羊の肉、ハナグミを供える。伝染病が入らぬよう祈るとされる。山羊肉のおつゆを各戸で出てたべる。山羊肉は御嶽にも供える。

〈上地〉

アータニドリ つちのえとのね、うしの日

一日目 未明、男は畑に出かけ、一隅に粟を播種する。この日粟のイバツをつくり、神床、仏壇、火の神に供える。播種から帰った男がイバツの初を切りたべる。

二日目 各御嶽で祈願があり、神役の家でタネドリの歌をうたう。

三日目 仕事をせずあそぶ。

本当の粟の播種は早くて十月である。

マイタナドリ 米のタナドリは大原の苗代に播種をおこなった時である。

ジュンガツタカヒ 火災予防の祈願。ピダマがあげられる時期だという。

十一月

〈宮里〉

七日 ハーザヨイ 昭和二五、六年頃廃止。鍛冶屋が作る刃物で殺された動物の魂がやってきてうらみをはたすので、鍛冶屋は当夜眠らず三回にわたって祈願する。

トウジ ハツシヨウガツ トウジズーシイ(鶏肉入り)をたべる。

〈上地〉

七日 フウギマツリ 鍛冶屋のまつり。夜、男のみでやる。

十二月

〈宮里〉

大晦日 火の神は一年のしめくりに天にのぼり、一月四日に帰る。

〈上地〉

二四日 ピノカンマツリ この日から一月四日まで火の神はその家にいないとされている。二四日に太陽がのぼると同時に一緒に天にのぼり、一年中の家庭内の報告をするという。カマドの石はこの留守の間にとりかえる。

リュウグウマツリ 十二月頃のいんびのみずの日。航海安全を祈って浜辺でやる。供物には山羊の頭、山羊など四足の肉を煮たものをそえる。この供物のハチを芭蕉やマーニで作った帆船にのせ海に流す。

3 予備的覚書 (一)

(1) 暦法について

正月をのぞき他はすべて現在も旧暦（太陰太陽暦）を用いている。正月を新暦（太陽暦）でやるようになった理由の一番は、学校、官庁などが新暦で運営されているため、これにあわせた方が便利だからだとされている。正月は直接農耕暦と無関係であることにもよる。しかしもう一度旧正月も軽くやる。

正月を新暦でやることは、約一カ月早く正月がくることになり、正月前の儀礼に影響を与えることになる。与那国島祖納では、十月から十一月にかけての約一カ月にわたるマチリの期間が、新正月にかかるおそれがある。マチリの期間は獣肉の禁忌があるので、正月にそれがかかると困る。そこでなるべくマチリを早く日取るよう考慮している。

暦法はこのように従来の旧暦を殆んどすべての儀礼に用いているので、ここでは本土にみられるような一月遅れというような方法は全くないし、またその必要もないといえる。

(2) 日取り

年中儀礼は一年の中のある定まった時におこなわれ、かつ、くりかえされる儀礼であるが、表1表2の儀礼表からうかがえることは、日取りの決定に次の二つの型があることである。

〔1〕 定日によるもの。定日におこなわれる儀礼の種類は表3に示した。概して農耕暦に関係がうすく、ある一部落のみの儀礼である七例をのぞく十四例は五部落のほとんどがおこなっている儀礼であ

表3 定日におこなわれる儀礼

月	日	儀 礼 名	白	宮	祖	宮	上	王
			保	良	納	里	地	府
1	1	ネ ト ウ	○	○	○	○	○	○
1	2	ハ ツ ウ ク シ	/	○	○	○	○	/
1	4	(火の神)	○	/	/	○	○	/
1	8	ヨ ー ガ ー	○	/	/	/	/	/
1	16	ジ ュ ー ロ ク ニ チ	○	○	○	○	○	/
2		ピ ン ガ ン	○	○	○	○	○	○
3	3	サ ニ チ	○	○	○	○	○	○
4	1	イ ス カ バ イ	/	/	○	/	/	○
4	1	パ ク 害 よ け	○	/	/	/	/	/
5	4	ハ ー レ ー	/	/	○	/	/	/
7	13 15	ソ ー ロ ン	○	○	○	○	○	○
8	8	ヨ ー ガ	○	/	/	/	/	/
8	8	コンジンへの願	/	/	/	○	/	/
8	15	十 五 夜	○	○	○	○	○	○
9	9	ク ニ チ	○	○	○	○	○	○
10	1	火 事 よ け	○	/	/	/	/	○
10	1	イ ス カ バ イ	/	/	○	/	/	○
11	7	カ チ ヤ	○	○	○	○	○	/
11		冬 至	○	/	○	/	/	○
12	24	(火の神)	○	/	/	/	○	/
12	24	トシノシュビ	/	○	○	/	/	/

○ あり / なし

※ 参考に王府(由来記による)の儀礼を入れてみた。

る。定日のきめ方として、①太陽の運行にもとづく(ピンガン、トウジ) ②月令に関係する(一・二日、七・八日、一五・六日、二四日に日取る諸儀礼) ③重ね日(サニチ、クニチ、ヨーガ)がみられる。定日におこなわれる儀礼は、ほぼ正しく一年毎にくりかえされることになる。注意されることは、これらの儀礼が沖繩本島、さらには本土の年中儀礼に共通し、かなり定型的であること、太陽の運行に関して

は立春及びこれに前後する儀礼がなく、また立春より起算しておこなわれる儀礼もみあたらないことである。

〔2〕 定日でないもの 旧暦を基本としながら、様々な因子を考慮するので、該当する月は必ずしもどの月と固定出来ない。考慮されるのは、十干十二支、五行、農耕暦などである。

十干十二支は必ず考慮されている。このくみあわせを厳密に考慮すると六十日を周期とすることに
なり、最初のくみあわせが都合が悪い時、あとをとるとすればその間約二カ月間の差となる。たとえば新城島上地では、シツの日取りは盆あとと七、八月の戌の戌、亥の日とされている。一九六五年、これに該当する日は、盆の翌日七月十六日か、この二カ月あとと九月十八日であった。上地の移住先である西表島大原では、九月では遅いといつて七月十六日をとったが、上地では後の九月をとった。この例からもわかるように、干支のみを考へても儀礼期日は非常に融通性をもち、地域により数十日、三つの月のずれとなり、周期がらえば一年毎ということではなく、一年目のその頃ということになる。儀礼に合ったよい日をえらぶということが、その儀礼の目的をまっとうさせるとする宗教的意味の重視からしても、如何に良い日をえらぶかには非常な意が用いられてきたことはよく知られている。干支についての意味づけは統一されているわけではない。⁽¹⁾ 黒島宮里ではカンピュールといえ、ね、うま、とら、とりをとるのがよいとされ、白保では農耕については木と水、御嶽や葬礼については木と火がよいとされる。木とは甲、乙、水とは壬、癸、火とは丙、丁にあたり、干支の他に五行も考慮さ

れている。波照間島では土、金、水が神行事に使用される五行であるとされる⁽²⁾。儀礼の主題にそって干支五行のあてはめ方が異り、村々の生産構造も異なるとすれば、農耕儀礼が多様な期日におこなわれるのは当然であり、実際、八重山の村々で同じ目的の儀礼が日を変えておこなわれているし、それはまた当然でもある。しかし一年を通じて、結局は、相似た構成をとり、年間の中に納まって、ほぼ年毎にくり返す儀礼となるのは、日取りをするにあたっての起点行事に定日のものがあるからである。シツについてみれば、新城島では盆あと、つまり七月十五日以前にはならないのであり、白保ではジュウゴヤ以後となる。農耕暦にそっておこなわれる農耕儀礼は、儀礼の順序は一定しているから、はじまりの儀礼がきまれば、あとはおのずと進行する。

このようにほぼ一年毎にめぐってくる儀礼の他に、何年目にか、何の年(十二支)ということでおこなわれる儀礼がある。例は少いが、与那国島のシテガンは七年おき(今は廃止)、宮良のキツガンは子、寅、丑、酉の年(現在は丑、寅の年のみ)におこなわれるというふうである。

また、個人として必ずやるわけではないが、やるとすればその月日にやるという儀礼がある。一月のマリトシ、八月のクルタテのように、マリトシにあたる人、クルタテをせねばならぬ人のみがその日にやるのである。

このような日取りの決定にあたって必要とされるのは暦法の知識である。八重山に何時頃からどのような暦法が用いられるようになったかは定かではないが、首里王府の支配にもとづく中央暦法の影

響は十分考えられるところである。王府にとって宗教支配は重要な政策であり、その組織の中央集権化は儀礼の面にも及んでいる。『琉球国由来記』の記載にたとえば「公儀ヨリ日撰」「島中ニテ日選」とあるように多くの儀礼は上よりの通達によっておこなわれた。現在も八重山における諸儀礼の期日は、神役や役所関係者らによって勘案され、通達されるものが多い。期日決定が複雑であること、村全員共同で担われる儀礼が相当に多いためであろう。

沖縄の農耕儀礼の中心作物として稲作が注目されてきたが、これは日本本土において稲作儀礼が他に比して卓越し、宗教上も非常に重要であると考えられており、これと同様に沖縄の各所でも稲の儀礼はきわめて重々しくおこなわれていたからである。

八重山の耕地利用についてみると、水田率二二、八％（一九六〇年）で、全沖縄の水田率一五、九％（一九五九年）に比べかなり高く、八重山が米産地として古くから知られ、かつ、旧慣時代に本租は米納であったことが理解できよう。しかしそれにしても畑は約三分の二を占め、現在は畑作物として甘蔗、パイナップルなどの新しい換金作物が栽培されているが、かつては粟、麦類、キビ、大豆などの穀類及びイモが栽培され、この中特に粟、麦、イモが重要であった。儀礼を考える上に八重山の栽培作物として、稲と同時に粟、麦、イモなどの畑作物も注目すべきであることが知られよう。これに関する有益な指摘はすでにいくつかある。伊藤幹治は「稲作儀礼の類型的研究」⁽³⁾の中で、沖縄における稲作儀

礼が稲作、畑作複合化していることを示し、その有力因子として双方の生産構造の重複をあげている。また佐々木高明は沖繩の畑作農耕技術そのものについて論じ、伝統的農耕形態として比重の高い畑作の、その中心作物は粟、麦その他の雑穀とイモ（サトイモ、ヤマイモなど）であり、これらは何れも冬作の体系によって経営され、同時に稲作の体系もこの冬作システムであることを明らかにした。⁽⁴⁾つまり本土における稲作は夏作であり、播種―収穫が、春―秋に対応し、祭祀儀礼も春・秋が中心であるのに対し、沖繩の稲作の播種―収穫は、冬―夏であり、その上、畑作物もこれに準じていて、稲作畑作儀礼の複合化の可能性をうらづける。

表1・表2によってもこのことは明らかに看取出来る。このようなことから稲作と畑作という二毛作的生業転換は考えられず、これに対応する一年折半構成はありえない。

稲作は現在二期作がおこなわれているが、二期作稲に対する儀礼はない。畑作儀礼については、稲作との複合形態ばかりでなく、畑作儀礼そのものもかなり明瞭にみられる。

農耕儀礼に関与する作物は、稲、粟、麦、イモ（甘藷）であるが、これらの儀礼の型はほぼ次のようにおこなわれる。

稲 播種儀礼（タニドリ）―生育儀礼（ムヌン、ソウジ）―初穂儀礼（スクマ）―刈り上げ儀礼（豊年祭）
粟、麦も稲と同型である。⁽⁵⁾ただ播種儀礼が、稲においては実際苗代に蒔く際におこなわれるのに対し、粟や麦は象徴的に畑の一隅にまくのであり、本当の播種はその後になる点が異っている。

イモの儀礼は九月九日に感謝の祈願がおこなわれるのみである。

厳密に定日でない諸儀礼の中から、農耕儀礼或はそれに関連するもの以外は次の儀礼である。

防災関係の儀礼 十一例

氷にがい 四例

牛馬のねがい 四例

その他 二例

該当月は、二月、八月、九月、十月、十一月である。これらの儀礼の中、特に防災（火事、伝染病、遭難等）関係の儀礼が多く、村の地域的状況に左右されることも少いから広い範囲にみ出せる儀礼であらうと予想する。

(3) 始めと終り

〔1〕 儀礼はその一つ一つに於て目的をもち、それ自身で完結するものであるが、一方いくつかの他儀礼とさらに関連しあい、共通の大目的を達成しようとする場合がある。表1・表2の儀礼中に、しばしば願いの始まり、ウクスムヌウ、ハツウクシなどというようなはじまりの儀礼と、これと対になるおしまい、とめ、しゅびの儀礼がある。また始めと終りは、明確ではないが、同じような儀礼が対になっておこなわれるものもある。これはおそらく、年のくぎり方と関連しよう。この関係の概略を

月	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
宮							ニントウク ハツククシ フネハツククシ 火の神	クサシ ソーシ											
里																			
上																			
地																			
農耕曆																			
季(白保)	ウーナツ	クーナツ	ヒサツ																
琉球国 由来記 八重山島	シツ	タネドリ	タカベ	サウリ	タカベ	物忌	ウリスン	カーチ	ウーナツ	クーナツ	ヒサツ	タカベ	サウリ						

表4に示してみた。これは儀礼の質的意味と関係することから、儀礼内容のくわしい分析を必要とするが、ここでは、それにはたちらず、現地における儀礼の説明による。儀礼内容にくわしくたちらばもっと多くのものが出てくるだろう。

この表4によって次のことがわかる。

(a) 始まりの意味のみられる儀礼の多い月は八月、九月、十月、一月、

(b) 終りの意味のみられる儀礼の多い月は、五月、六月、十二月

(c) 同じ儀礼が対になっている月

二月—十月、二月—九月、一月—八月—十月、四月—十月、二月—五月—十月、一月—八月、二月—八月

(d) 八月、九月、十月は、農耕暦における始まり前と始まり、六月は農耕暦の終り、二月、十月は季節の変わり目の意味がある。

(e) 一月、十二月には、農耕暦や季節と特に関係がみられない。

(f) (A)(B)四部落の間の構成上の相異は非常に少い。その部落のみの儀礼として注目されるものは、

① 与那国島における旧十月、十一月の二五日間のマチリ

② 与那国島のイスカバイ。これはおそらく王府（中央）祭祀の影響ではないかと思っている。

〔2〕 一つの儀礼内の時間について指摘だけであるが、〔1〕願を解く（今迄のことⅡ過去）

〔2〕感謝

(今のこと||現在) [3] 次の願い (今から後のこと||未来) の三つの部分をもつことが見られる。例えばプーリイについて白保の場合は、一日目バンプトキ、二日目プープリン(収穫した作物の感謝)、三日目エンヌユーニゲー(未来の世願い?) というように明確にこの構成をとる。プーリイについてすべての事例がこのように区ぎりをもった明確さではないが(宮里では一日目ウバンプトキ、二日三日目、イエンユーノネガイ、四日目トウルパライ。上地一日目ウバンパジ、二日目ジョウビ、三日目アトヨイ。与那国では儀礼の名称がウガンフトテ)、願をとく、感謝し、次の世乞いの三構成は、明儀礼内容にたち入れば一層らかである。

[3] 三回以上くりかえされる儀礼

祖納のドゥノニシガイ(三回) 以外には、みあたらない。

(4) 時

儀礼をおこなう時刻のとり方もいろいろであり、儀礼内容にたちいることになるが、ここでは一般的なとり方を示す。

(a) 潮の干満 願いごとは満潮になろうとする前の時刻、葬式は干潮になろうとする前の時刻とされる。

(b) 儀礼そのものが夜おこなわれるものがある。フキヌヨイ(鍛冶屋の祭)は夜から明け方までの間

おこなう。

(c) (b)は霊の活躍の時刻と関係するらしい。『おもろさうし』⁽⁵⁾に“神の時は子丑の刻、寅卯の刻”とあるが、盆の送りは夜十二時以後、鶏の鳴く迄の間とされ、プーリイの時の来訪神が他界に帰る時刻は一番鶏の鳴く明け寅の刻とされている。フキヌヨイは、刃物で殺された動物の霊がその間活躍するのである。

注

- (1) この点についての考察は、次の機会にしたい。
- (2) 鈴木正崇「波照間島の神話と儀礼」『民族学研究』四二—一 昭和五二年
- (3) 伊藤幹治「稲作儀礼の類型的研究」(一)(二)『国学院大学日本文化研究所紀要』昭和三七年 昭和三八年
- (4) 佐々木高明「南島における畑作農耕技術の伝統」『沖繩 自然・文化・社会』昭和五一年
- (5) 植松明石「沖繩・八重山の畑作とその儀礼」『跡見学園女子大学紀要』第十号 昭和五二年
- (6) 『おもろさうし』の例えは21—70
ねうしか、とき、かみぎや、とき、
とら、うの、とき、かみぎや、とき

他の構成要素及び全体的考察は別稿でおこないたい。